

つり光

No.155 2021. 9

発行 真言宗豊山派
北田山 寶泉寺
所沢市北岩岡 130
編集 色 摩 真 了
ホームページアドレス
takaranoizumi.com

玄奘三蔵のススメ

～般若心経を求めて～



日本で最も有名なお経の一つに玄奘訳の「般若心経」があります。寶泉寺でも様々な機会に皆さんとお唱えしていますね。

なぜ般若心経がこれほどまでに広く知られ、仏教界以外からも多数の関連書籍が販売されるほど人気があるのか。それは、このお経が世界の真理を説いていると考える人が多いからでしょう。

古くは唐の時代、やはりこの世の真理が知りたいと般若心経をはじめ当時最新の仏教経典を天竺（インド）から持ち帰るため一人の青年僧侶が立ち上がりました。三蔵法師玄奘その人です。

玄奘は西暦 600 年代に活躍した国公認の僧侶で、中国からインドをほぼ単独で周遊しました。その総距離は一説には地球一周半分にも及んだと伝えられています。

般若心経

「般若波羅蜜多心経」の略。

般若は智慧、波羅蜜(多)は完成の意。

その心髄が説かれたので般若心経という。

森羅万象は実体を持たない空であり、

存在は関係によって成り立ち、その現れ方は、

自らの心の作用に依ると説く。とてもロジカルなお経。

※『光明』220号でも特集されていますので

そちらも併せてご覧ください。



『光明』第220号

幼少より頭脳明晰にして、とても好奇心が強かった玄奘は当時中国に存在した仏教経典を全て修めてしまうと、より高次の教えを求め単身西へ旅立ちます。なんとこの出国は法律違反でした。

法を犯してまで知識を求め出た旅は過酷を極めたものだったようです。まず、気候の問題。暑い砂漠では50度近くまで気温が上がり、山脈越えでは氷点下に気温が下がります。そして数々の関所の通過に食料調達問題、言葉の壁も深刻だったことでしょうし、旅の途中、少なくとも2回は盗賊に襲われたことも記録に残っていて、この冒険の凄まじさは『西遊記』のモデルとなっています。

これらの難関を乗り越えインドに到着した玄奘は、当時数千人の僧侶が勉学に励んでいたナーランダ寺院で優秀な成績を修め、インド各地で約10年間を過ごしたのち帰国。その後、一生をかけて経典の翻訳にいそしみました。17年にも及ぶ留学の旅でした。

玄奘はこれほどまでに困難に満ちた旅を、どのように成功させたのか。まずは並外れた知力体力を持っていたこと（身体が大きかったという記録もあるそうです）。仏教の理解や言語の習得はもちろんのこと、法話や交渉術にも長けていた玄奘は行く先々で庶民から要人まで多くの人々を味方（スポンサー）につけ人的支援や金品の援助を受けています。しかし、賢いだけでは人はついてきません。万人を惹きつける優しさや強さなど人間的な魅力も存分に持ち合わせていたのでしょう。

そして、何よりも最新の仏教を絶対に持ち帰るぞという強い意志。この確固たる信念が不可能を可能にしたのだと私はそう考えています。これから般若心経をお唱えする時には玄奘さんの御徳に思いを馳せてみるのも良いかもしれませんね。（真了）



写経とご詠歌のススメ

寶泉寺では般若心経を写経する「写経の会」と般若心経を毎回お唱えする「ご詠歌の集い」を、それぞれ月2回開いています。興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

老僧のつづき ⑮

我が家では数年前から「カメ」を飼っていました。ある日「るり洞」のテラスで発見、誰かがここに放したか、捨てたかと思われます。このままどこかに放して生きていけるだろうかと思案じ、古いベビーバスがすみかになっていました。ところがお盆過ぎ、カメがいません、物干し竿から落ちた雑巾がベビーバスの縁に掛かっていたので、これを足場にでてしまったようです。今になってはなんとか生きながらえてもらいたいと願うだけです。

さて仏教の教えの要は戒律を守って成仏を願うことにあります。その第一に挙げられるのが「不殺生戒」です。生きとし生けるものを殺さない、殺させない誰でもが当たり前に持っている倫理観でもあります。仏教には「放生会（ほうじょうえ）」という儀式があり、神仏混淆の時代を示すものとして神社でも行われています。とらわれの生き物をとき放つという法会で殺生を戒め、命を大事に生かすという不殺生戒の教えをあらわすものです。東南アジアの大寺院などでは境内に小鳥、カメ、小魚などを売り込む人がいることがあります。参拝客はこれを買って空中や川、池などにとき放つのです。この行為を善行とし功德になるのだとされています。日本でも神社仏閣にはよく池がありカメや魚が泳ぐ光景があります。これを「放生池」といい、元はというと生き物を放生するためのもので境内を構成する一つでもあったのです。

ところで告別式で出棺の際、ハトを飛ばす場面に出会ったことはありませんか？小僧（しょうそう）は2度ばかりの経験があり、参列者のとまどいの表情も記憶しています。葬儀社からもその意味などについてお話があればなあとも思ったものでした。その意味は故人になりかわって、とらわれのハトをとき放つという善行、功德をもって故人が仏の世界に導かれるというものです。以前葬儀関係者から聞いた話ですが、ハトを飛ばす回数やその数などが葬儀社の力量をあらわすという話もあったそうです。

カメの話に戻ります。調べてみたらカメは水のないところでは生きて行けないようで、さて今ごろどこでどんな風に生きているのか、命も絶えてしまったのか。とらわれの生き物が解放されたのだからよしとするか、その後生きる環境がなく死んでしまったのなら「不殺生戒」にふれてしまうのか、なんともモヤモヤがつのるカメ騒動でした。

皆さんの作品をお寄せください

この数年、大師堂の休憩室を早瀬川一男さん（87）の写真で飾っています。まだまだ元気、今でも愛車で各地を巡り撮影されています。ぜひご覧下さい。

寶泉寺では写真や絵画、また、この「るり光」への寄稿は大歓迎です。関心のある方は遠慮なくお問い合わせください。



早瀬川さんと作品

カブトムシ の幼虫が雑木林の落ち葉の中で育っています。育ててみたい方に差し上げます。

毎年の年明け、落ち葉を寄せ集めて堆肥にして植木や家庭菜園に使っています。今年はなぜかカサの目減りが速いなぁと思っていました。しかしそれはカブトムシ幼虫のエサになっていたからと合点、幼虫は例年にならない多さです。どうぞ遠慮無くお申し出ください。

編集後記

- ・実りの秋、柿が色づいてきた。今年は教科書的に剪定、摘果のせいか数が少ないが試しに口にしたら十分食べられる。スタチも時期が来たようで本堂前のカゴからどうぞ、運が良ければですが…。12月にはユズも同様にどうぞ。
- ・東京オリパラが無観客で開かれた。すったもんだの末の開催であったが周辺の論議は別としても、スポーツは人の心を熱くする。最終日のマラソン、視覚障害者の女子マラソンの優勝が特に印象深い。小僧(しょうそう)は30年以上も前のことだが数回のフルマラソンを完走した。初マラソンの際レース中おなかがすいて、コンビニでアンパン

を求め口にしたところ、すぐ目の前を絆で結ばれた視覚障害者ランナーが通り過ぎた。しばらく併走、なぜか涙が止まらなかった。目標タイムにはわずかに及ばなかったが、スポーツは心を熱くし奮い立たせるのは間違いない。今後のオリパラはどのような変化があるのだろうか、来年は北京冬季オリンピック、これからも熱いゲームやレースを熱望している。

・新型コロナの安心の確保にはまだ2、3年はかかるかと専門家、毎日発表される患者数に一喜一憂、冬にかけて不安も大きい。政権交代と後に来る総選挙、政治状況にはそろそろ新しい空気と安心感が欲しい。

Sep. 15, 2021 (琴)